

北海道



にぎわい

日本海にぎわい・交流海道ネットワーク通信 Vol. 222



北海道南西沖地震から25年 奥尻島のこれまでとこれから

北海道奥尻町

奥尻町は、北海道南西沖地震（1993年）で甚大な被害を受けた年から今年で25年目を迎え、5月25、26日に、地域安全学会の2018年度春季大会（目黒公郎会長、一般社団法人地域安全学会主催、奥尻町・奥尻町教育委員会共催）が奥尻町の海洋研究センターで開催され、島内外から延べ200人が参加しました。

25日の研究発表会では、参加した大学や専門機関の研究者が、防災、災害対応、復興、ライフライン、医療など60編以上の個別発表がなされました。

26日のシンポジウムでは、谷岡勇市郎・北海道大学大学院教授が、奥尻島を含めた北海道周辺の地震活動のメカニズムをわかりやすく解説しました。

続くパネルディスカッションでは、奥尻高校生2名が登壇し、島全体を学校にみたてた「まなびじま奥尻」プロジェクトと題して、スキューバーダイビング、島の「プロ」が講師となる町おこしワークショップ、他校を島に招く「北の巖流島」など、奥尻島の魅力を発信するユニークな取り組みを紹介し、会場から感嘆の声が上がりました。

地域安全学会 2018 年度春季・奥尻大会 公開シンポジウム

奥尻島の これまでとこれから

5/26 土
9:30~
11:30

北海道の南西端の離島、奥尻島では、古くから人々の歴史が営まれてきました。「オウシブルー」とも呼ばれる透明度の高い海と水産資源、ブナの森に育えられた水と森に育つ多様な生物。そのような「恵み」の一方で、日本海中部地震（1983年）、北海道南西沖地震（1993年）などの自然の「厳しさ」を経験し、そこから再建してきた歴史があります。本シンポジウムでは、「奥尻島のこれまでとこれから」をテーマに、基調講演とパネルディスカッションを実施します。基調講演では、自然科学の観点から、北海道と奥尻島のこれまでとこれからの地震・津波について学びます。パネルディスカッションでは、様々な形で島に関わる人々が、奥尻島の自然・歴史・文化をふまえて、これまでの取り組みなどを振り返り、奥尻島の「これから」について考えます。参加者のみなさまにとって、奥尻島の新たな一面を知る機会となりましたら幸いです。

【プログラム】

開会挨拶 一般社団法人地域安全学会 会長 目黒公郎

■基調講演「北海道・奥尻島の地震津波について」

谷岡勇市郎（北海道大学大学院理学研究院 附属地震火山研究観測センター 教授）

■パネルディスカッション「奥尻島のこれまでとこれから」

パネリスト：稲垣森太（奥尻町教育委員会 学芸員）

安藤晃希・林 東吾（奥尻高等学校 2年）

コメンテーター：中林一樹（首都大学東京 名誉教授）

コーディネーター：定池祐季（東北大学 災害科学国際研究所 助教）

開会挨拶 奥尻町 副町長 田中敦詞

会場 奥尻町海洋研修センター 多目的ホール

主催 一般社団法人 地域安全学会

共催 奥尻町・奥尻町教育委員会



研究発表会の様子（25日）



パネルディスカッションの様子（26日）